黒人研究の会会報

*Japan Black Studies Association Newsletter No.71* **(June 26, 2010)**

第71号　2010年6月26日

# 例会発表要旨

11月例会　2009年11月28日　神戸市外国語大学

## Empty and Wild：Toni Morrisonの描く奴隷像

時里　祐子

本論の前半では、モリソンが作品中で、いかに奴隷制というトラウマを脱構築的に「把握不可能」な体験として描いているかを分析し、民族のトラウマ記憶を、のちの体験やメディアの影響を通して構築されるものとして描いていることを指摘する。その考察の結論となるのは、トラウマ体験とは他者も経験した本人も把握不可能な、つまり脱構築的な体験であるうえ、トラウマが病理として現れ出るメカニズムもまた一枚岩的に把握できないことを、モリソンが認識しているがゆえに、その作品が脱構築的手法を多用したものであるということである。

後半は、トラウマという病理を抱えた登場人物たちが、作品中で過去の出来事に対して「赦す」という精神状態に至ることなく、作品がオープン・エンディングで終わることを指摘し、登場人物たちが過去と明確な和解をできないことを描きだすこともまた、モリソンの、脱構築的な世界観を表していると考察する。モリソンは、トラウマという事象を脱構築し、悲劇を体験した人物の精神に起こるいくつもの体験として描き分けたが、過去を「赦す」という体

験に関しても、同様に、やはり登場人物は、簡単に「心を癒され」、「赦す」という行為にいたることはできない。本論ではこれを、脱構築論者のジャック・デリダが南アフリカ共和国のアパルトヘイトにまつわる論文で、多民族国家には各民族の各言語における「赦し」の概念が存在するにもかかわらず、南アフリカ共和国憲法は、「神の名において過去と和解する」と「英語」という一つの言語で断言してしまっていることの危うさ（デリダはディスコースによる原暴力と表現している）を指摘していることと結び付けて考察し、モリソンは、トラウマと同様、「過去」と和解することの困難さ、深淵を、脱構築的表現の複雑さによって表現していると考察した。全体の結論は、トニ・モリソンは、民族のトラウマ的歴史にまつわる、「個人の記憶の不可侵性」、そして、その個人の歴史をディスコースによって一枚岩的に「大きな歴史」に組み込むことの暴力性を強く認識している作家だということである。

## イギリスで学んだもの （レジュメ）

加藤　恒彦

Ⅰ Caryl Phillipsの最新作とイギリスにおけるブラックの現状

- 新作の紹介　・移民の歴史と現段階（チャペルタウンやブラッドフォード）
- Oluwaleの殺害に関する二冊の著書が今出版された意味。

Ⅱ Monica Aliの最新作 In the Kitchen, 2009
イギリスにおける新たな奴隷制度

Ⅲ ナイポールからインド英語文学へ

Ⅳ ブラック・ブリティッシュ文学の展開と定義

- Small Island, Andrea Levy,
- the UNBELONGING, Joan Riley, The Women's Press, 1985.
- Hanif Kureishiの評価を巡って
- Black British Lliterary Cannonとブラック・ブリティッシュ文学の定義

１２月特別例会　２００９年１２月１２日　キャンパスプラザ京都

〈特別シンポジウム〉
偉業／異形のパフォーマー: マイケル・ジャクソンの生涯と作品
JBSA Special Symposium: Off Many Walls: Life and Works of Michael Jackson

〈プログラム〉
シンポジウム趣旨説明・・・・・・・・・鉄井　孝司（神戸市外国語大学・講）
発表１：MJとその時代・・・・・・・・・鉄井　孝司（神戸市外国語大学・講）
発表２：マイケル・ジャクソンとイメージのムーンウォーク・・・・・平尾　吉直（首都大学東京）
発表３：Jackson 5、人種、音楽市場・・・・・デイビッド・ホプキンズ（天理大学）
発表４：クロス・オーバー：マイケル・ジャクソンのベースライン・・・・コンラッド・ベイヤー（近畿大学・講）
（発表4は英語発表：Crossing Over: Michael Jackson's Successful Use of Popular Music Conventions・・・Konrad Bayer）
質疑応答・自由討論

MJシンポジウムの趣旨/感想

シンポジウム・コーディネーター：鉄井　孝司
　今年2009年に亡くなったマイケル・ジャクソンがポップスの世界を代表する大スターであったことはおそらく異論のないところでしょう。しかし、彼の活躍の目覚ましさと釣り合わない関心の低さが黒人研究者の間にあったことも否定しがたい事実です。私たちはこのことから出発し、彼をめぐる主として2つの事柄に焦点を絞って考えてみようとしました。第１は何故彼がこれほどの人気を得ることができたのか。そして第２は、彼が体現しているものはどのようなものかということです。これらの問いにこたえようとすることを通じてアメリカ社会の文化的状況が見えてくるのではないかと思ったのです。
　各発表者の役割は次の通りです。鉄井はMJの活躍した時代を概観すること、平尾は彼をめぐる人種観について、Bayerは彼の音楽の特色を、そして最後にHopkinsはアメリカの音楽産業におけるMJの位置を確定すること。ただ、彼をめぐる問題は多岐にわたる複雑なもので、私たちは決して特定の答えを用意できたわけではありません。しかし、これをきっかけに様々な研究者、音楽愛好家たちがMJをめぐる議論をさらに深化させてゆくことこそ私たちが本当に望んでいることなのです。
　各発表の後、質疑応答が行われました。コーディネーターとしては「人種」観をめぐるものに終始しがちだったことは残念といわねばなりません。MJの表現者としての影響の大き

さを考えるとき、彼の存在意義を「人種」の問題のみに限定することはもはや時代遅れではないでしょうか。

## MJとその時代

鉄井　孝司

　マイケル・ジャクソンが活躍した1960年代から現在までのアメリカの文化状況を考える上で一つのヒントとなるのは「ポストモダニズム」という概念である。ポストモダニズムとは何かについては多くの研究者が様々な定義を試みているが、Frederic Jamesonの議論を援用して、その特色を3点にまとめてみた。まず第1は「個の主体の喪失」。これは誰もがもうこれ以上新しい何かを生み出すことができず、みんなのスタイルが似たり寄ったりになってしまうこと、と簡単に言い換えることができる。

　2つ目は”Pastiche”と名づけられた現象である。これはもともとフランス語で「模倣」を意味するが、モダニズム期に登場した様々なスタイルが模倣に模倣を重ねて利用され続けた結果、もはやオリジナルが持っていた歴史的含意とかアイロニーなどが捨象されてしまうような形でランダムに引用されるような状態を指す。

　最後は「歴史性の危機」。これは2つ目の現象と深く関連している。たとえば「伝統的」とみなされてきた表現形式はもはやそれが生み出された歴史的時代背景を「参照点」として表すことはできなくなり、結果として歴史意識の変革が起こり従来の「歴史」という概念が通用しなくなる状態を指す。

　このようにポストモダンという時代を考えるとMJほどこの時代を見事に体現したポップ・スターはいないことが理解できる。彼が一見誰も追随できないほどのスタイルを持っていながら、一方で真の「革新者」として認められない理由もそこから来ているのである。

## マイケル・ジャクソンとイメージのムーンウォーク

平尾　吉直

　マイケル・ジャクソンは根拠のないスキャンダルに悩まされてきた。一連のスキャンダルはすべて根拠のないものであるか、真実だったとしても責められるべきではないものかのどちらかである。唯一、罪に問われるべき幼児虐待疑惑には、無罪判決が下されている。それらに共通するのは、マイケル・ジャクソンは人間／動物、黒人／白人、男性／女性、大人／子供といったさまざまな範疇に収まらない、中性的で奇妙な存在であるということだ。ネルソン・ジョージは『Ｒ＆Ｂの死』のなかで、黒人であることと男性であることを結びつけ、

中性的なイメージを持つマイケルを「気持ち悪い」といった感情的な言葉で攻撃している。また、こうした中性的なイメージは白人聴衆を意識したポップ化の結果であるということが仄めかされることもある。

アフリカ系アメリカ人は「黒人らしく」ふるまえ／「白人のように」ふるまえという二重の要求によって拘束されてきた。しかも、相反する二つのイメージにはどちらも制限が設けられている。「黒人らしく」振舞っていた黒人がひとたび制限を超えて危険な存在になると、厳しく排除される。一方、「白人のように」振舞っていた黒人が制限を超えて完全な同化を求めた場合も、やはり拒絶される。マイケル・ジャクソンは、「黒人らしい」イメージから自分を遠ざけてきた。しかし、そのことこそがマイケルを人種差別社会における危険な存在にしたのである。マイケルは明らかに「白すぎた」のだ。

とはいえ、マイケルが白人になりたかったとは限らない。少なくとも、彼自身は自分を黒人でも白人でもない、普遍的な存在として規定したがっていた。マイケルの「普遍」に対し、自らを越境者と位置づけたのが同時代のミュージシャン、プリンスである。マイケルの「普遍」とプリンスの「越境」は、互いに補完しあいながらアメリカの人種障壁に風穴を開けることに寄与したのである。

## Jackson 5、人種、音楽市場

デイビッド・ホプキンズ

Jackson 5がモータウンレコード社と契約した1968年は、音楽業界とアメリカ社会全般の画期的な1年でした。ずっと分裂していた黒人音楽文化に新しく融合が行われていて、モータウンの業界圧倒に、もっとauthentically blackと思われた音楽が初めてポップチャートに成功をみせていた。モータウン社の社長、Berry Gordyは、Jackson 5で白人のローティーン市場を徹底するつもりで契約した。しかし、Jackson 5 は既に黒人向きのChitlin’ Circuitという黒人経営ライヴ音楽業界のベテランで、人種アイデンティティはもうできていた。 契約一年目の間に、モータウンがJackson 5を“白化”しようとしたが、人種的のアイデンティティはテンションの高い、曖昧なもののままで残った。マネジャーであった、父Joe JacksonとGordyの対立を辿って、Jackson 5のモータウン時代を再考した。この時代のidentity politicsは、後のMichael Jacksonの変身（？）にも大きいヒントを与えるだろう。

# Crossing Over: Michael Jackson's Successful Use of Popular Music Conventions

Konrad Bayer

Michael Jackson, possibly more than any other pop artist of the 20th Century, managed to bridge the gap in musical tastes between African American audiences and European American audiences. Many other Motown artists paved the way for his achievement: Smokey Robinson, Stevie Wonder, Marvin Gaye, The Supremes, The Temptations, and the group Michael Jackson was in with his brothers, The Jackson 5. All of these groups had successful careers, and appealed to divers groups. They helped popularize soul and R&B music among white listeners. However, none achieved the same level of crossover success as Michael Jackson.

However, before a discussion and analysis of Jackson's music, the following questions need to be answered: What is postmodernism in music? What are musical conventions? What significance do the conventions have? and What social values are expressed by Michael Jackson's music? Following my suggestions of possible answers to these questions, other questions present themselves: Why did Michael Jackson remake his image? How did he remake his image? These are the questions which lead to a discussion about the music Michael Jackson wrote in the late '70s and early '80s.

The presentation will look at the pop, disco, funk, soul, R&B, rock, hard rock, and heavy metal conventions that Michael Jackson drew from to appeal to diverse groups expressing a variety of musical tastes. In order to illustrate ideas about the conventions Michael Jackson drew on, two songs written by Michael Jackson, will be compared, "Don't Stop 'til You Get Enough" and "Beat It." The discussion will center on how Michael Jackson engaged with the conventions he chose and why he chose those particular conventions to express his social values.

In the conclusion of the presentation, I suggest that Jackson was able to express social values that resonated among the many different people who came to appreciate and love his music.

＊Bayer氏のマイケル・ジャクソン関連の論文は以下のURLから読むことができます。
http://www.japanafrican.com/vol3no7.htm

２月例会　２０１０年２月２７日　神戸市外国語大学

## 東アジアとアフリカの関係史研究――その構築に向けて

古川　哲史

本例会発表の目的は、報告者が開始しようとしているプロジェクト「世界史における東アジアとアフリカ」（East Asia and Africa in World History）の構想を紹介し、参加者の批評や意見を受け、今後の研究計画立案・遂行に活かそうというものであった。

報告者は今まで、「第二次世界大戦期までの日本―アフリカ関係史」に取り組んできたが、その成果を出発点として、この研究では対象地域を東アジア（主に中国、朝鮮半島、日本）に領域をひろげて、東アジアとアフリカの関係史を世界史的な視点から明らかにしたい。当面は、理論かつ実証面（19世紀末から20世紀半ばにおけるいくつかの事例研究）での個人研究に従事するとともに、この大きなテーマに取り組むことのできる国際的な共同研究の組織化の見通しを探る。

本研究テーマは、日本をはじめ東アジアとアフリカとの間にいかなる史的関係があったかを、政治や経済関係のみならず、文化的接触、人的接触も含めて明らかにすることである。それはまた、研究領域の空白を埋めるだけではなく、そもそもグローバルであるはずの世界史に、従来、アジアとアフリカの間で別々に扱われてきた諸相を繋ぐ＜接続性＞をもたらすことになろう。なお、このプロジェクトが将来的に「世界史における東アジアとアフリカ、アフリカ系ディアスポラの研究」（East Asia, Africa, and the African Diaspora in World History）という課題にどう繋がるかも考えたい。

４月例会　２０１０年４月２４日　キャンパスプラザ京都

## 沖縄と黒人文学――目取真　俊を中心に

北島　義信

目取真俊は１９９７年に芥川賞を受賞した沖縄の現代作家である。その受賞作品『水滴』は、主人公・徳正の右足が突然、「冬瓜（すいぶ）」のように腫れ、動けなくなることから始まる。その腫れた足を妻のウシが張りたおしたことによって、足の親指の先が破れ、そこから

水が滴り落ち続けるようになる。すると毎夜、戦死した兵士たちが現れ、その水を飲んで喉の渇きをいやす。彼らは沖縄戦で、水を求めて死んでいった兵士だったのだ。最後に現れたのは、友人石嶺であり、彼は感謝の言葉を述べ、壁の中に消えてゆく。

一方、その「水」はすべてをよみがえらせる不思議な力をもっていた。それに気づいた従兄弟の清裕（せいゆう）は、徳正の看病の中で、その「水」を集めて、高い値段で、「毛生え薬」「肌の若返り薬」として売り、大きな金儲けをするが、徳正の右足が元通りに治るとその「効能」は突然なくなり、客たちからひどい目にあわされる。

目取真はこの作品において、沖縄における土着の文化としての生死観に基づき、戦死した兵士たちを登場させ、過去と現在をつなぐことによって、沖縄の現実が語りかけるものを主体的に把握することに成功している。

基地問題においては、沖縄県民の意思尊重こそが、日本の基本的立場でなければならない。このことを明確に主張できないとすれば、「日本の安全のためには、基地の存在もやむを得ない」というイデオロギーが生き続けているからであろう。このイデオロギーの払拭は、主体自身の生き方と現実認識のあり方を問うことなしには、不可能である。それを可能ならしめるのが、目取真の文学である。土着文化を基軸にした人間の主体性の確立という点において、目取真の文学と黒人文学には、大きな共通項が存在している。

５月例会　２０１０年５月２２日　神戸市外国語大学

『琉神マブヤー』に見る沖縄の文化と精神

山本　伸

このところ新聞等で沖縄という字を見ない日はない。日米関係はもとより軍事的な「抑止力」という考え方そのものを問い直す時期に来ているなかで、沖縄という存在は現代の日本そして世界にとってこれまでにも増して大きな意味を持つ。

その沖縄で来月JBSA全国大会が開かれるのを受けて、本例会では数年前からブームになっている「琉神マブヤー」というご当地ヒーロー番組を通して基本的な沖縄文化とその精神の紹介を行った。マブイとは魂／心のことであり、番組は沖縄のこころをあらわす9つのマブイストーンを悪のマジムンが奪うことで沖縄を混乱・困惑・落胆させ、マブヤーがそれらを取り返すことで平穏・無事・元気を取り戻すという筋書きだ。

この番組が沖縄の子どもたちはもとより大人にも大うけなのは、グローバリゼーションの影響下で薄れつつある沖縄の文化に対する何気ない危機感とその価値を見直せればという柔らかな願望を刺激したからであり、奪う側と奪われる側の両側面から付かず離れずの立ち位置で穏やかに見守れる快適さがそれに拍車をかけたのではないかと私は見る。

マジムンのボスのハブデービルが第一のマブイストーンである「ウチナーグチ」を奪うときの名ゼリフ――「ウチナーグチのマブイストーンは言葉を消すために奪ったんじゃない、ウチナンチュのこころを消すために奪ったわけよ、シャーシャーシャーシャー（蛇の擬音）」は、そのルックスからは想像もできないほど絶大な説得力を持つ。

皆さんも、ぜひ一度ご覧あれ(youtubeでも見ることができます）！

# 会員からの投稿

## ドイツにおける反FGM(女性性器切除)活動の近況

光森　幸子

【はじめに】

まず簡単に報告の背景を紹介しておきたい。ドイツにおけるFGM（女性性器切除）反対活動について調べる手がかりを与えて下さったのが、日本における活動団体、WAAF

（Women’s Action Against FGM, Japan: FGM廃絶を支援する女たちの会）の活動家の方々である。

最初に私が連絡を取ったのは、下記に記事を紹介するマリ共和国出身で現在バイエルン州エルランゲン市の市会議員であり、Forward-Germany（ドイツの反FGM団体の一つ）の経営委員会に所属されているピエレッテ・ヘルツベルガー・フォファーナ博士（Dr. Pierrette Herzberger-Fofana）だった。Forward-Germanyの現在の主な活動としては、2月6日にエルランゲン市での反FGMのIAC（インター・アフリカン・コミッティ）のアナウンス企画、また3月6日から8日までは国際女性デーにちなみ、フランクフルト市の市庁舎前でFGM反対のデモ等が行われた。そして5月15日からは『ナイジェリアの女性芸術家たちは訴える』というテーマで、「女性に対する暴力に対し『全レベルにおいて絶対に赦さない』という言葉が闘いの合図にならねばならない」との決意の下、7日間のプログラムがエルランゲン市とエルランゲン−ニュルンベルク大学の協力で行われた。

Forward-Germanyの活動の詳細を知る為の資料が欲しいことをフォファーナに伝えると、快く電子メールでいくつか記事を送付して下さった。その中から二つ、反FGM国際デーの2月6日に寄せて書かれた「インターナショナル・デー『女性性器切除に対するゼロ・トレランス』」（“Internationaler Tag ,Null Toleranz gegenüber Genitalverstümmelung’”）と、5月19日に上記のイベントで上映された映画、『モーラーデ』(Moolaadé)に関し執筆された記事、「『モーラーデ』 女子割礼廃止の為の主張映画」（“Moolaadé – Ein Filmplädoyer für die Abschaffung der weiblichen Beschneidung”）を翻訳し、ドイツにおける反FGM活動の一端を紹介したいと思う。

尚、記事中にはFGMや女子割礼に関する名称がドイツ語、英語、フランス語で使用されているので、文脈上同等だと判断した下記の名称は、翻訳する際に以下の日本語に統一した。

- Weibliche Beschneidung （Female Circumcisionの対訳として、女子割礼）
- Weibliche Genitalverstümmelung, FGM: Female Genital Mutilation, MGF: Mutilations Génitales Féminines （女性性器切除）

【“Internationaler Tag ,Null Toleranz gegenüber Genitalverstümmelung’”】

インターナショナル・デー 「女性性器切除に対するゼロ・トレランス」

2010年2月27日

ピエレッテ・ヘルツベルガー・フォファーナ博士

2月6日には、国際的な日である女性性器切除に対するゼロ・トレランスを全世界が思い出します。なぜこの日が選ばれたのでしょうか？

1984年2月6日に、セネガル共和国の首都ダカールにおいて、女性性器切除に対し闘う為にインター・アフリカン・コミッティ（IAC/AF）が設立されました。53のアフリカ諸国のうち28の国がこの委員会に所属しています。委員会の主導により、会設立の20周年にあたる2004年に、国連が2月6日を女子割礼、または女性性器切除に対するゼロ・トレランス国際デーだと公布したのです。アフリカのほとんどの国が、2003年モザンビークの国際会議で「マプト議定書」を批准し、2015年までにアフリカ大陸における女性性器切除廃止を確約しています。

しかし、「私達はベニン共和国における女性性器切除の終結を祝います」というような間違った報道を読むとしても、どのアフリカの国も今日まで完全に女子割礼を排除してはいないのです。このような主張は単に間違いであるばかりか非生産的です。割礼の実施率が17パーセントから13パーセントに減っているだけです。

「女子割礼、または女性性器切除に対するゼロ・トレランス」国際デーである2月6日には、全世界と特にヨーロッパにおいて、女性性器切除問題に注意を喚起する活動が行われます。女子割礼は遠い国々の問題であるだけではなく、ヨーロッパにおいても少女達は性器切除されているのです。実際にサハラ砂漠以南からの移民女性達の大きな共同体があり、彼女達は夢や希望、その上、民族の風習を携えてヨーロッパに来ました。多くの移民女性達が故郷の女性性器切除の慣習をしっかりと保持しています。この背景に対し、これらの切除された女性患者達が、適切な医療処置を受けることと、ドイツにおける現在の法的な状況について知らされることも大切なことです。

ドイツでは移民法により、女性性器切除は犯罪になります。このような結果を避ける為には、まさに特別な啓蒙と予防的な活動の実行が肝要です。危険にさらされた少女は、こうして必要な保護を受けることが可能になるのです。更に私達は、住民の適切な意識、連邦全土にわたる無料の相談所、そして科学的に立証されたデータを支持しています。なぜなら捏造された数字で恐怖を煽る情報は、数十年来この分野に従事している多くの人々を励ますことにはならないからです。

このような状況において報告すべきプラスのこともあります。例えば、2010年の1月10日にモーリタニアの首都ヌアクショットでの宗教指導者達の社会参加です。彼らはモスクでの毎週金曜日の説教で、女子割礼がイスラムの信仰とは何の関係もないということに常に注意を促すことを今や約束したのです。モーリタニアでは女性の住民の70パーセントが傷を受けています。このことは、いつの日かアフリカ全土が健康を危険にさらすこの風習から解放される、という最初の一筋の希望であります。

FORWARD-GermanyとAFARD/AAWORD（Association des Femmes Africaines pour la Recherche et la Développement /Association of African Women for Research and Development）である私達は、全ての組織と共に活動することを望んでいます。私達は共にドイツにおける女子割礼を廃止し、アフリカで努力している28の精神的打撃を受けた国々を効果的に支援します。

（上記の記事の掲載サイトhttp://www.afrikanet.info/menu/diaspora/afrika/）

【“Moolaadé – Ein Filmplädoyer für die Abschaffung der weiblichen Beschneidung”】
『モーラーデ』女子割礼廃止の為の主張映画

2010年2月6日

ピエレッテ・ヘルツベルガー・フォファーナ博士

世界的に有名なセネガルの作家であり映画監督でもあるウスマン・センベーヌ(Sembene Ousmane)の映画『モーラーデ』は、女性性器切除、あるいは女子割礼についての討論を確実に前進させた。2004年カンヌ国際映画祭で表彰されたこの映画(1)は、女子割礼の伝統、またはアフリカの幼い少女たちの「サリンダス」（Salindas）(2)に反対する訴えであり、そして今日の儀礼実施に反対する一人の若い女性、コレ・アルド（Colle Ardo）の勇気ある闘いについてである。四人の幼い少女たちは彼女に庇護を求める。彼女たちは不可侵の聖域を提供する「モーラーデ」という古くからの慣習を頼るのだ。避難所である「モーラーデ」と割礼、つまり浄化儀礼は対極に置かれることになる。

この慣習は、今日においても53のアフリカ諸国のうち28の国で実施されている。映画、『モーラーデ　―希望の魔力圏―』の中で、映画制作者は「サリンデ」という純潔の慣習の儀式に対する一人の女性の抵抗を描いている。五歳から十歳の間の少女たちの為にサリンデの催しが7年毎に行われる。この年齢のグループの少女全てが浄化、すなわち割礼されるのである。儀式の直前に二人の少女が行方不明になり、夫が現在旅行中であるコレ・アルドの所に四人がモーラーデ、つまり避難許可権を申し込む。モーラーデの申請者は保護され、その者を傷付けることは禁じられている。それは非常に古くからの慣習なのだ。コレは7年前に、「私の娘は割礼されない！」と彼女独自の正当性を主張し、ただ一人生き残った娘の「浄化」を拒絶したのである(3)。

問題となった少女の母親たちは、「サリンダス」と共にコレの家を包囲する。他の妻からの村追放と離婚の脅迫にもかかわらず、コレは自分の立場を猛烈に弁護する。公共の場での夫からの鞭打ちという激しい暴力行使にも怯まず、かつて断固として自身の立場を貫

いたように決して避難所の終結という言葉を口にしない。伝統に深く根差している地域社会において、彼女の行動は一つの地震に等しい。男性たちはその時まで「サリンデ」を女性の問題だと見なしていたが、彼等の権威が揺らぎ、「モーラーデ」と「サリンデ」の間の対立が悪い結果を齎すことを恐れ、これらの論争を深刻に受け止める。伝統の擁護者と近代性の支持者の間の諍いは深刻化し、予想もしなかった結果を迎える。討論が行われ、賛否両方の立場が十分審議され、全ての可能性が考慮される。遂にリーダーたちの多くが、この割礼の実施を終わらせる時だと認識する。コレの抵抗は決断力のない人々の連帯を呼び覚ます。女性たちは歌と「ワッサ、ワッサ」(「私たちは勝った」)という言葉で勝利を喜ぶ。彼女たちは努力が報われたことを表現する。これから先、この地域ではどの少女も割礼されることはないのだ。

センベーヌは、カンヌで受賞した映画、「モーラーデ」(2004)を通し、女性性器切除(F.G.M./MGF Female Genital Mutilation/Mutilations Génitales Féminines)が子どもに対する四つの人権侵害であることを具体的に示している。彼は少なからぬ数の支持者を揺り起こし討論を促進させたのである。アフリカの全ての芸術家たちは団結し、このセネガルの映画監督のように、彼等の専門知識や才能に応じ啓発活動を推し進めている。

真っ先にウスマン・センベーヌは一人の力強い女性像を描写した。この映画は、アフリカの女性たちへ、彼女たちの連帯、自己意識、そして勇気に対して献呈されたのである。

(上記の記事の掲載サイトhttp://www.afrikanet.info/menu/kultur/film/)

(訳者註)

(1) 邦題は『母たちの村』。カンヌ国際映画祭で、ある視点部門グランプリ賞(Un Certain Regard)を受賞した。

(2) 割礼施術者たち

(3) コレ自身も割礼を受けており、その為に以前に子どもを流産している。

【おわりに】

ドイツにおける反FGM活動の現状を知ることはこの国が抱えている移民問題と、移民が保持しようとするアイデンティティの問題に深く関わることである。国外離散の運命を背負った移民たちは喪失の危機にあるアイデンティティを移民国で保持する為に母国の文化に頼る。FGMは移民たちの心に深く根差す問題だ。しかし、FGMが女性に対する暴力であることは反駁しようのない事実である。なぜ『モーラーデ』をエルランゲン市で今回上映したのかをFORWARD-GERMANYのメンバーの一人であるトーベ・レヴィン

（Tobe Levin）に尋ねてみると、この映画の中でコレに反対する村の女性たちの声、つまり外部からではなく内部からの声の重要性を取り上げ、ウスマン・センベーヌの反FGMのメッセージを無視する解釈があることを示唆して下さった。これを知ると、フォファーナが記事のタイトルに「女子割礼廃止の為の主張映画」だとわざわざ書かなければならなかった真意が見えてくる。FGMは文化相対主義で片付けてはならない問題なのだ。

ドイツには現在FORWARD-GERMANYを含め、反FGMのNGOが30以上あることがFGMの進行と敷衍、またそれと闘うアクティビストたちの問題意識の高さと取り組みの緊急性・重要性を示している。

註1．トーベ・レヴィンはハーバード大学アフリカ系アメリカ人研究所W.E.B.デュボイス協会の準会員で、32年間FGM廃絶の為の運動に取り組んできた研究者・翻訳者。

（ドュッセルドルフ市在住）

・以下は儀礼的な暴力に反対するFORWARD-Germanyの活動のビラです。

# 追　悼　文

# 和田フミ子さん、さようなら

赤松　光雄

あれほど精勤に月例会に参加していた和田さんが顔を見せなくなって半年以上もたっていた。舌がんの手術をしたということだった。かなりためらった末に、古川博巳氏と二人でお見舞いに行くことに決めた。

４年近く前の暑いさなかの一日、和田さんは池田市の老人ホームで療養中だった。不意の訪問に驚いた和田さんは予想外に元気そうだった。ベッドに半身を起し、病状を話し、会員の消息を聞こうとした。持ち前の好奇心の強い和田さんは戻っていたが、手術の後遺で話は聞きづらく、時々分った振りをして相槌をうった。「去年は一通も年賀状を書けなくて・・・」とさびしげに告げる横顔はひきつり、痛ましい思いで見た。

早々に辞する積りだったが、たまたま当日ホームのリハビリ活動の一環で歌の会が予定されており、是非参加をと誘われた。大ホールに集まり、懐かしの小学唱歌やナツメロの流行歌に、私たち二人も我を忘れて大声を張り上げたが、和田さんは傍らで思いに耽るようにじっと耳を傾けていた。

帰り際にはもう夕暮れ時が迫っていた。長い廊下を杖を頼りに歩きとおしてポーチに立ち、和田さんはいつまでも名残の手を振っていた。目をつぶると、今も彷彿とその姿が浮かんでくる。

快方に向かっていると信じたかったが、病状は楽観を許さぬものだった。密かに隙を狙っていたがんは再発して臓器に転移し、和田さんは豊中市の病院へと移された。高齢による衰えも加担したのか、一進一退を重ねながらも、病状は悪化の一途を徐々にたどっていった。和田さんのエスペラントを通じての親友の話では、「去年の暮れごろには、もう意識も薄れ、とても回復の見込みは無さそうでした」という。

今年の春はもう来ないのでは、と思われるほど季節外れに肌寒い日が続いていた。３月３０日、聞きなれない姪御からの電話で、和田さんの早朝の死を告げられた。茫然と不覚のうちにその知らせを聞いていた。

和田さんは、黒人研究の会の母体の神戸外大の前身、神外専の出身で、私とは同窓の友だった。野田高校の教員をしていた昭和３０年代の始め、私の誘いで発足間もない会員を快諾してくれた。会員数２０人にも満たない小世帯で、文字通りゼロからの出発で、会計も赤字続きの火の車だった。その会計係を和田さんは進んで一手に引き受け、以来殆ど倒れるまで、会計は和田さんの独占だった。そのほか、月々の例会は節々の記念事業においても、積極的にその企画や運営面で、地道に「縁の下の力持ち」の役割に甘んじて徹した。会の最上の功労者の一人と言っても過言ではない。持ち前の明るさと屈託の無さは接する会員の厚い信頼を受け、誰からも愛された。暇があればせっせと旅に行き、エスペ

ラントの学習に熱をあげたが、とりわけカメラの腕は出色で、新聞社の写真コンクールにもしばしば入賞したが、会の写真係としても欠くことのできない貴重な存在だった。

私たちは「地獄坂」の急坂を喘ぎながら共に大地を踏みしめ、例会へと急ぎ、黒人問題の本質を議論した。そして送年会の「エクラン」で酒を酌み交わしながら、会の未来に思いを馳せた。早々の頃醸成されていた情熱と連帯感は、決して風化させてはならないと思う。そんなことを考えながら、和田さんの生前を偲んで、会員の皆さんとともにご冥福をお祈りしたい。

（神戸市外国語大学名誉教授）

# 新　入　会　員

田中　都　（たなか　みやこ）氏

自己紹介：グロリア・ネイラーの『ママ・ディ』にあたるうち、エコクリティシズム、エコフェミニズムに興味を持ち始めたところです。

猪熊　慶祐（いのくま　けいすけ）氏

自己紹介：気がついた時にはアメリカ黒人の文化にどっぷりと浸っていました。耳にする音楽はソウルやラップ、ジャズ。観戦するスポーツはバスケットボール。自然と黒人のスターにあこがれるようになり、アメリカで注目されるのは黒人であると認識するようになっていました。黒人の歴史・差別・奴隷などのことを詳しく知る以前の話です。

趣味は趣味とある線引きをし区別をしていたものが、ひょんなことから研究対象になりました。現在は1920年代の黒人文化、ハーレムルネッサンスに焦点を絞り始めたところです。

宜しくお願いいたします。

橋本　美世　（はしもと　みよ）氏

自己紹介：大阪市立大学文学部前期博士課程２回生の橋本美世です。と、言いましても子供たちが学校を出て、今度は私の番、と入学しましたので、若いわけではありません。昨年は一年が瞬く間に過ぎてしまいましたし、今年もまた忙しくなりそうですが、大学のおかげで、心身さわやかに過ごしております。

　アメリカ南部の文学に興味をもっていまして、まだまだ手探りの状態ながら、フォークナーを勉強していきたいと思っています。どうかよろしくご指導お願い申し上げます。

峯　麻衣子　（みね　まいこ）氏
自己紹介：九州大学大学院　比較社会文化学府在学。専門は黒人文学/黒人研究です。学部では、Ｊ・Ｈ・コーンの黒人神学について、修士課程ではアボリショニズムにおける「自由」の概念をめぐって、黒人が希求していた自由と、アボリショニストたちが考えた自由の違いを歴史的に考察しました。現在はWPA Slave Narratives に興味があります。執筆中の博士論文は、数多くの黒人作家が、１９３０年代後半に行われた政府の公共事業、ＷＰＡによる元奴隷への聞き取り調査に参加した詳細を明らかにすることと、そのときの経験がその後の彼らの創作活動に与えた影響について論じる予定です。よろしくお願いいたします。

# 会 員 消 息

兼子 歩 氏

# 訃 報

酒向 登志郎 氏 ： 立教女学院短期大学学長（65歳）、2010年5月6日逝去

和田　フミ子　氏

編集後記

６月１１日から始まるサッカーの第１９回ワールドカップ、会場はアフリカ大陸初の開催国となる南アフリカ共和国ですが、世界規模のスポーツや文化イベントの開催国となった途上国の例にもれず、南アフリカ政府も、このイベントによって多くの国民が貧困から抜け出せるとうたったものの厳しい現実と直面しているようです。ヨハネスブルグやケープタウンなどの都市では、外国人観戦客の目を意識した市内「浄化」の過程で人権無視の行為が頻発していることが、国連の住宅関連特別報告官ラクエル・ロルニクの最近の報告で指摘されました（Newsweek日本版　Vol.25　No.23より）。その行為とはおもにスラム街の強制撤去および、そこから遠い場所に急設された仮設キャンプへの強制移住、それらにともなう警察の暴力的行為などを指すようです。そもそも南アフリカでは、アパルトヘイト廃絶後、住宅政策が打ち出されながらも、資金不足などから滞り、スラムから追い出した人々を劣

悪な仮設キャンプに移すだけという状況に陥っていたはず。世界的な景気後退の影響もあり、予想される外国人観客数もこのW杯の経済効果も下方修正されたとなれば、すでに投入された40億ドル以上の資金で、単なるスラム撲滅ではなく、上下水道、電気を整備するなど、どれほどそこに住む人々の生活環境の改善をなしえただろうかと思わずにはいられません。

（時里　祐子）

＜編集＞　黒人研究の会・編集部
〒603−8143　京都市北区小山上総町
大谷大学文学部・古川哲史研究室気付

＜編集者＞　時里祐子